

ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、フラオ グルッペ株式会社代表取締役で、生活評論家としても幅広くご活躍されている 沖 幸子さんに、古川県人会事務局長がお話を伺いました。

沖 幸子

おき さちこ

姫路市出身

1946年9月20日 兵庫県生まれ

主な経歴 1969年神戸大学卒業後、全日本空輸株式会社、ライオン株式会社などを経て、1987年フラオ グルッペ株式会社創立、代表取締役。経済産業省、厚生労働省などの審議会委員を歴任。聖徳大学客員教授。

出身校 県立姫路西高等学校、神戸大学教育学部



な気がします。

高校までは姫路で過ごし、神戸大学に進学されていますが、その頃のお話を聞かせてください。

小学校卒業後、自宅近くの賢明女学院に通ったのですが、どうしても公立の姫路西高校に進みたかったので、入試に必要な新しい科目を学ぶため、3年生に姫路市立広峰中学校に転校しました。ただ、賢明女学院の頃から始めたテニスは、今でも続けています。

その後、無事に姫路西高校に入学したのですが、京都の大学に進学したいと希望したら母親から猛反対され、地元で進学か就職かの二者択一を迫られました。結局、「家から近いところなら」ということ、また郷里で就職するなら教員だということもあり、神戸大学教育学部に進学し、卒業時には小学校、中学校の英語と理科、高校も英語の免状を取りました。

そして、親の希望もあり、兵庫県の教員試験を受け、合格するのですが、どうしても親元を離れ自立したい気持ち捨てきれず悩んでいました。

ところが大学卒業後、全日空に就職されていますが、それはどういうわけですか。

私は、大学卒業後はどうしても親元を離れ、自分の力で生活したいと思っていました。そのころの大卒の就職先はほとんどなく自分で探すとなると公務員かマスコミ、航空会社の一般公募くらい。崖から飛び降りる。つもりで難関の航空会社を受けようとしたところ日本航空と教員採用試験の日が重なってしまい、結局、教員採用試験を選びました。ただ、「今の自分の人生は一度しかない」とすっきりしない日々を

過ごしていたところ、8月の初め、ふと目にした新聞の求人広告で全日空の客室乗務員の募集を知りました。当時、大卒の競争率が500倍くらいでしたが、幸運にもパスすることができました。

夏には結果が出ていたものの、その話を両親に切り出せたのは11月になってから。母親からはまたも猛反対を受けたのですが、父親の理解もあり「教員はもつと経験を積んでからでもできるから、社会勉強するなら東京でもつと苦労をしない」と。

そして全日空に就職し、念願の東京での独り暮らしが始まりました。これが今ある私の人生の大きな分かれ道となりました。

全日空入社後、ライオンを経て起業に至っていますが、起業を志したきっかけは何ですか。

当時、客室乗務員の定年が30歳だったことと、実際の勤務は慣れてくるとそれなりに楽しい充実した日々でしたが、私にはもつと違う世界がありそうな気がし、全日空を2年で退職し、母親の強い希望もあり、いったん郷里に戻りました。上司や先輩たちには、「もつとやれるのに」と引き留められました。

全日空退職後は「何かものを作りたい」と、チャンスを探しながら、大学の聴講生でマーケティングの勉強をしていると、化学の実験ができることもあり、新聞広告で見つけたライオンに研究職で中途採用されました。研究所に配属され、グループリーダーで開発した製品でもいがけず社長賞をいただき、その機会に転部を希望しました。

転部先は希望どおりの本社のマーケティング部となり、そこで商品開発や販売の実務に携わりながらスキルを磨いていたところ、ドイツに行くチャンスに巡り会います。取りあえず、2年間休職しました。昇進が遅れると心配する声もありましたが、チャンスは前髪でつかむが、モットー、気になりませんでした。

ドイツでは、暮らしの質そのものが高く、女性が家事を上手にこなしていました。掃除のビジネスも定着し、いまの私のビジネスの原点やアイデアもいたるところにありました。ある日、ドイツの森を散歩していた時、「これからの高齢化社会の家事で一番大変なのは掃除かもしれない、このビジ

姫路市のご出身と伺いましたが、最初にふるさとへの思いについてお聞かせください。

今日、所長さんに改めてご挨拶申し上げますと、所長さんが私が出た野里幼稚園の後輩だと判り、びっくりしました。

小学生の頃は、帰宅するとランドセルを放り出して、弟とその友達を引き連れて日が暮れるまで、播州平野の四季折々の自然を相手に遊びまわる、という元気で活発な子供でした。人形遊びには興味がなくて、女の子という感じではありませんでした。

春になればひばりを追いかけて回し、時には肥溜めに落ちこちたなど、数えきれない思い出があります。そのような子供の頃の原体験が現在の評論や執筆活動の源になっているよう

ネスを日本の女性のためにやろう」と閃き、帰国したら掃除屋を始めようと心に決めました。

起業当時の苦労などを教えて下さい。

帰国後、会社から慰留されて退職まで1年もかかりました。せっかくなので休職までしてドイツに出かけたのだからそれを生かしてほしいのは当然かもしれません。

さて、念願かないようやく起業できましたが、約30年前の日本では、掃除は女性が箒とちり取りでやるものという考えが根強く、実際、家庭向け掃除ビジネス^①に参入した大手企業の撤退が相次いでいました。

起業した直後はほとんど仕事がなく、これまで準備した貯金を全部使い果たしました。ただ、ドイツ式とされる方法、つまり窓ガラスだけ、キッチンだけ、風呂場だけという場所別分をプロの手で掃除し、現金でお金をいただくわが社のやり方が、小さいけれど確実に良かったと思っています。

起業してから3年ほどが過ぎた頃、ようやく仕事が増え始め、会社も軌道に乗ってきました。現在でも無借金経営が誇りです。

生活評論家としても活躍なさっていますが。

私は掃除の会社を経営していますが、実は掃除が好きではありません。ただ、綺麗にすることは大好き。

時間がありませんので、いかに時間をかけず、体力も使わず、効率的に上手に家事をこなすかが大切だと思っています。

我が社のスタッフたちにも、わたくしの本を読んでくださっている読者の方々にも「掃除が嫌いでもいい。上手になりましょう」とお話しします。

私自身3年間は掃除の現場に出て陣頭指揮していましたが、ある日、スタッフに「もう、現場に出ません」と伝え、現場から離れました。自分の中に十分なノウハウが確認されたのとスタッフたちに自立してもらいたいと思いました。

以来、経営に専念していますが、私自身の現場の経験は、いまでも、目を閉じるとスタッフの動きや現場の様子が手に取るようにわかり、とても貴重な目に見えない財産です。

10数年前、ある出版社から「掃除の会社は珍しいから、掃除の本を書きませんか」と勧められました。本を書くことは会社のマニユアルを公開することにつながり、スタッフから

は反対されました。私は「マニユアルは使っている時にはもう古い。マニユアルは『生き物』なのでどんどん新しくしていかなければいけない。外へ出すことによって、新しく磨かれ再生されるもの」と、あえて押し切って出版しました。

なんと、その本が15万部以上のベストセラーになり、掃除ブームに火をつけ、マスコミから「掃除のカリスマ」と呼ばれるきっかけとなり、気が付いたら生活評論家としての活動をするようになっていました。

また、掃除のビジネスをやってみたい、御社で働きたいという方々も殺到しました。

ファンクラブもあるとお伺いしていますが、少し紹介下さい。

私の本を読んでくださった方々が集まっている「ほうきの会」というファンクラブがあります。いつのまにか、北海道から沖縄まで、約4,000人の方が会員です。

私の本は、最近では中国語に翻訳され、海外からのメールも増えました。

兵庫県内の会員の方々も多く、数年前、神戸新聞で連載エッセイを書かせていただいたときにはなつかしいメールもたくさんいただきました。

現在、兵庫県では女性などの起業家に支援を行っていますか、今後、起業を目指す方へのアドバイスをお願いします。

女性には起業に向いています。女性の発想は、生活に密着したことが基本で、小さいながらも自分の見つけたものや欲しいものを堅実に実現する才能にあふれています。

起業する時には、2年くらいの事業プランをつくり、ダメなら、簡単にあきらめず、どの時点で区切りを付けるかなどの発想の柔軟性も大切です。私の場合、石の上にも3年と自分を叱咤激励し、無我夢中に働きました。

起業したら小さいものから始めてコツコツと堅実に、しかし少し先を見ながら地面を踏みしめるように歩く。少しだけ夢に向かって冒険をする。石橋を叩いて、ひとつひとつ手応えを感じながら、創意工夫を楽しむ。

大きくしようと無理をしないこと。私が起業した時の同業者で、今も残っているのは2社だけですが、この30年間の時代の波に翻弄されてしまったのかもしれない。他人や周りの意見に耳を傾けつつ、最後まで自分を見失わないこと。他人にやさしく、自分に厳しくが私のモットーです。

お客さまの顔が見えて、手応えを感じつつ自分のやりがいを実感できる、ほどほどの大きさの会社で良いと思っています。もちろん、世のためになる誠実な会社であることも大切です。

先ほど、「少し先を見ながら夢を」とおっしゃいましたが、現在の夢は何でしょうか。

経営の傍ら、執筆・講演活動が続けていますが、これまでの経験を生かし、読者の方々が温かい気持ちになってくださるエッセイを書き続けていけたらと思っています。

今年、10年越しの夢が実現します。水彩画が趣味で、ちよつと空いた時間や気分転換に描き貯めていました。この春出版するエッセイ本の挿絵で、初めて私のつたない水彩画を公開させていただきます。

下手ながら、いつかは自分の書いた文章を水彩画で表したいという長年の夢が実現しました。

きたる東京オリンピックでは英語やドイツ語のボランティアをしたと思っています。帰国後もドイツ語の雑誌を読み、スキルを落とさない努力をしています。英語はともかくドイツ語の会話能力はどうしても落ちていきます。3年後に向けてドイツ語のブラッシュアップも始めたいと思っています。

最後に、兵庫県人会の方やふるさと兵庫に対するメッセージをお願いします。

以前、兵庫県人会で常任幹事を務めさせていただきました。ありがとうございました。

兵庫県は神戸新聞で連載を持っていた縁で、数年前に各地の風物を知り、「兵庫県は恵まれている」と感動しました。ただ、そのような兵庫県の素晴らしさを東京や県外の人たちは知りません。世界遺産の姫路城が四国にあると思っています。人さえないです。

首都圏から兵庫県への移住を促す取組をされていますが、これは全国的な競争になっています。まずは「女性と若者」に兵庫県の自然や産物のすばらしさを伝えることから始めてください。また、取組のひとつとして、ひょうご出合いサポーターセンター東京を開設されていますが、私は婚活会社で構成するNPO法人の理事を務めています。また「こうのとり大使」の立場からも、兵庫県の有り余る魅力を何らかの形でお伝えするお手伝いができればと願っています。